

防災としての倫理観の考察

——「寛容」の検討より「寛容」の検討より——

水野雄司

はじめに

子供がマスクもせずに公園で遊んでいるとあって警察に通報する。感染対策をしていないとして、飲食店に罵詈雑言の張り紙をする。集団感染が発生した大学の学生ということだけで、アルバイト先が受け入れを拒否する…。このように他者に対して異常なまでの「正義」を振りかざす人たちが、今回の新型コロナ禍では多く報道された。ただしこうしたことはコレラ前から問題になっていたことでもあり、たとえば政治家や著名人の失言や不倫が必要以上に追求され、ネット上で炎上するといったことはたびたび起きていた。

この状態は「不寛容社会」と表現され、_和を以て貴しとなす_はずの日本人から、なぜここまで「寛容さ」が失われてしまったのかについて、多くの人が戸惑い、疑問を持つようになっている。

本論稿では、この「寛容」をテーマとする。ただし通常行われる日本における社会構造のゆがみや、他国との文化の比較といったアプローチではなく、「寛容」という日本語そのものを掘り下げること、その本質に近づいていきたい。